

## 復元機体吊り上げ式挙行



撮影 三浦 智介氏

平成12年3月12日、今日は我々の待望の復元機体永久保存のための吊り上げ式の当日である。普段は無骨な格納庫から今朝はグレンミラーの軽快な調べが流れてくる。会場は式の準備に追われているが、作業に携わる係の役員はいずれも今日の吊り上げ式を人一倍待ち望んでいた“復元する会”の面々である。

今年度の翔友会総会の目玉として総会と並行して開催が企画された吊り上げ式は、航空部創部60周年の記念すべき総会当日完成した霧ヶ峰式はとK-14型プライマリー、“アローヘッド”及び萩原式H-23C型ソアラー、“イオラス”の2機を従来は分解して格納庫の片隅に保管されていたのを、完全に組み立てを終わり、いつでも飛べる状態で格納庫の天井に吊り上げ、永久保存しようというものである。

両機の復元のための作業の苦心談は既に翔友XII号の誌上に詳しく述べられているが、愈々吊り上げを行う時になってその実施面で学校当局との間の交渉が難航を極めたが、坂口航空部長先生、

及び窪田幹事の献身的な交渉努力の甲斐あって、格納庫天井梁を補強することで当局の了解が得られ、2機並行吊り上げが可能になった。

当日は夜来の雨も上がり、薄日も指し始めた頃、各地から三三五五格納庫に参集する昔の仲間達は、会場入り口の受付で記帳しながら早くも懷古談に花を咲かせている。

『オイ！元気だったか！』

『久し振りだナー。何時までも若いけどお互いもう一度乗りたいナー』

二人寄れば話はすぐにグライダーに乗る話に行き着く。

西は九州福岡から昭和39年卒の豊浦君が、東は同じく昭和39年卒の斎藤君が埼玉越谷市から、また北は金沢から戦前OBの本田君がそれぞれ空に対する熱い思いに駆り立てられて馳せ参じた。その何時までも変わらない空への憧れと情熱の強さにはホトホト感心させられる。

吊り上げ式は午前11時予定通り開催された。60周年の総会で記念品として贈られた翔友会特製のジャンパーを着た牧野復元する会会長が司会役を買って出て、当日の式進行を計る。

#### 1) テープカット

復元作業が完成したのを記念して、会の趣旨や、この事業に協賛くださった方々の芳名、それに2機の3面図や性能を刻印した大型盾の前で女子部員が持つ紅白のテープに“はさみ”を入れる方は、小野翔友会会長、坂口航空部部長の両先生、それに今度の復元作業で忘れてはならない、窪田昌三君が指名され、政幹事が差し出す“はさみ”でめでたくテープカットが行われた。

#### 2) 挨拶と祝辞

小野翔友会会長と坂口航空部部長両先生の挨拶に続き、来賓としてお招きした大阪工業大学航空部 OB 船橋賢一郎氏と立命館大学航空部監督林達男氏から祝辞を頂いたが、舟橋氏には、大工大が所有している“アローヘッド”と同型の“はと K-14 型”プライマリーを参考にさせて頂いた経緯がある。また林監督は実際に復元作業に参加して頂いて、共に汗を流した仲間としてお招きした訳である。

#### 3) 経過報告

復元作業の中心的役割を果たした窪田、三浦、加藤、大久保の各幹事からはそれぞれ主に担当した各セクションの作業の苦心談の一席を報告の形で参集の皆様にご披露した。

前半の堅苦しい挨拶、祝辞、報告が終わると、後半はガラリと趣が変わり、参加者全員が行事に参加するという形で式典が進められるようになった。

先ず発砲スチロール製の大型模型グライダーが、

カレッジソングを伴奏に、風に揺れる五色の紙テープに乗って緩やかに引きあげられると、会場は一度に華やかさに包まれ、なごやかな雰囲気が場内に流れる。

#### 4) 飛行前の点検ディスプレイ

吊り上げを前にソアラの“イオラス”は、窪田教官の指導の下に、搭乗者に扮した加藤幹事がチェックリスト片手に神妙な顔付きで飛行前点検を開始する。

『左主翼。支柱取りつけピン！異常なし！』

『翼端、ソリ。異常なし！』

加藤幹事の大きな声が格納庫に響く。

『俺達もよう～絞られたナ～』

『寒い朝の点検はつらかったデ～』

会場のあちこちで囁き合う OB の姿が見える。その囁きに止めを刺すように加藤幹事の声がした。

『点検終わり！異常なし！』

#### 5) 乾杯

飛行前の点検が終わり、何時でも飛び立てる体勢になった“イオラス”を前に乾杯の準備が進められ、今や創部当時の唯一の生き証人である橋本先輩の音頭で復元機の前足を祝して乾杯が行われた。

そして愈々、我々待望の吊り上げの作業に移る訳であるが簡単そうに見えて、あれで吊り上げ作業は仲々大変な作業で、機体の重心の具合で引き上げが難しかったり、天井の電灯が機体の邪魔になったり。実はリハーサルの日には、全員相当苦勞をさせられた苦い経験がある。そこで、苦肉の策として、式当日は、吊り上げの難しいプライマリーの“アローヘッド”は吊り上げたままにして当日は吊り上げご披露式とすることにした。

さて、“イオラス”の吊り上げは吊り上げの係員以外にも、出来るだけ多くの出席者に参加をして頂き、皆サンの手で吊り上げることとした。場内から拍手の起こる中、“イオラス”は静かにウインチで巻あげられ、見事！格納庫天井に吊り上げられた！そして3年10ヶ月に及ぶ困難な復元作業を終わり見事吊り上げられた2機の同志社のシンボルともいうべき“アローヘッド”と“イオラス”は今後永久に格納庫に保存され、同志社のニューグライダーマン達の象徴として何時までも暖かい目で彼等の活動を見守ってくれることになった。吊り上げが終わり、美しい飛行姿を我々の目の前に見せてくれた両機にたいし、改めて会場からは一段と大きな祝福の拍手が起こり、その拍手は何時までも鳴り止まなかった。

『矢張りグライダーは飛んでる姿が一番エエナ～』

誰かがしみじみそう呟いた。

#### 6) 記念写真の撮影

我田引水の話ではないが、実際、吊り上げられたグライダーを見上げると、その美しい飛行姿勢には文字通り、改めて心引かれるものがある。これが私達を今日までグライダーを忘れさせない理由の一つなのかも知れない。

格納庫の天井に吊り上げられた2機のグライダーをバックに参加者全員の記念写真の撮影が行われた。

『オ～～イ！みんな！一寸澄ましてエエ顔で写ろうぜ！』

#### 7) くじ引き

愈々、受付で貰った三角くじの登場のときがきた。くじには赤、青、緑、黒の4色の丸印がついていて、女子部員が引いた4枚の大きなトランプ

の色で順次当落が進み、最後にくじの中に書かれた数字の大小で大型豪華景品が当たると言う仕組みに、会場は落選者の決定の度に大きな笑い声が巻き起こる。

結局、最後に残った、坂口航空部部長先生と渡辺幹事が発砲スチロール製の大型グライダーの模型を射止め、全員から祝福の拍手を受けた。

#### 8) テープカットのはさみ贈呈

はさみなどの“きれ物”を贈り物にすることには多少抵抗のある向きもあろうかと考えるが、考えようで、はさみとは833、つまり8と3が2つ、つまり8、3ツー、はちみつーで、翔友会と航空部、それに復元の会の三者は“はちみつ”のような甘い関係とこじつけ、小野、坂口両先生、ならびに、窪田幹事に記念として

『祝 復元機体吊りあげ式記念』

と書かれた袋に入ったはさみが贈られた。

#### 9) 3本締め

いろいろな趣向を凝らした吊り上げ式も愈々終わりに近づき、最後は牧野幹事の音頭で全員が景気よくシャンシャンシャン！シャンシャンシャン！シャンシャンシャン！と3本締めで無事式を締め括った。おめでとうございました！

# 吊り上げ式を終わって

復元する会 会長 牧野 鐵 五 郎

“復元する会”の使命は、平成12年3月12日の同志社格納庫に於ける吊り上げ式をもって一応終わりを告げました。今後の活動は、また別の企画による更なる発展を期待したいものですが、使命を終わるに当たりまして、これまでご協力いただいた皆様に事業の完成をご報告申し上げるとともに、改めて心から厚くお礼を申し上げたいと思います。

同志社大学航空部の象徴ともいえるべき“アローヘッド”と“イオラス”の2機復元計画は、昭和58年(1983)創部50周年の記念事業検討会の席上

- 1) 新格納庫建設
- 2) 新機体購入
- 3) 50年誌出版
- 4) 記念式典、祝賀会開催

の4件の重要計画とともに、取りあげられた重要企画でありましたが、実施に当たりましては、そのソフト、ハード両面での非常な困難さに遂に今日までその完成を見ることは出来ませんでした。

しかしながら両機を復元させたいと言う情熱は遂に平成5年12月、復元する会の発起人7人が田辺格納庫に集まり、つぶさに機体の現況を調査、平成8年の航空部創部60周年の式典に合わせて復元するための作業計画の作成に入りました。

直ちに翔友会の全員に“復元する会”からの呼びかけを行い、多くの協賛を得るとともに、各方面の資料の収集、資材の確保、作業工程の研究等の役割分担を決め、実質的な作業の開始を迎えましたが、何分にも昭和30年(1955)購入の“アローヘッド”と昭和37年(1962)購入の“イオラス”の現状は、両機を出来る限りオリジナルに復元したいと言う我々の希望とは遠くかけ離れておりまし

た。しかし、たゆまぬ各人の努力が困難で、高いハードルを次々とクリアーし、遂に平成8年の60周年の祝典には見事完成。数多くの仲間の祝福を受けて、ご披露することができました。

しかしながらその後の保管状態は従来と変わらず、格納庫の片隅に分解状態の寂しい姿のままでありました。かねがね我々は、なんとか2機のグライダーを格納庫の天井に吊り上げ、飛行状態の勇姿を再現したいと考え、学校当局とも数度に渡り交渉致しましたが、了解点に達することが難しく、難渋いたしました。坂口航空部部長先生と窪田昌三君のねばり強い交渉の結果、愈々吊り上げの工事の許可も下り、その作業も順調に進み。復元機体の完成式に続き、今回も平成12年の翔友会総会に合わせ、華々しく吊り上げ式の式典を挙行することができました。

無事吊り上げ式を終わり、これまでご協力下さいました皆様に厚くお礼とご報告を申し上げるとともに、今後も引き続き変わらぬご支援とご協力をお願い申しあげる次第であります。

最後に私事で誠に恐縮ですが、西暦2000年の記念すべき年に、偶然私は80歳の傘寿を迎えました。その記念すべき年に長年の願望でありました復元機体の完成、そして吊り上げ式を迎え、しかもその司会を担当させて頂き、こんな歓びはありませんでした。OB 諸君の力強いご協力が私の航空80年の良き年に、何よりの良き思い出を贈って頂きました。皆様には心からのお礼を申し上げたいと存じます。ありがとうございました。

# 会 場



小野会長挨拶



坂口部長挨拶



テープカット

# 風景



静かに上ってゆくイオラス



所定の位置に吊り上った二機



くじ引きの賞品は、坂口部長と渡辺先輩の手に。

## 誌上座談会

### 永久保存の吊り上げ式を終わって

出席者 牧野鐵五郎、吉川禎一、北尾直敬、三浦智介、窪田昌三、石元勲、  
河盛啓晏、竹鼻信昭、北村悦造、加藤 寛、大久保雅史  
司 会 牧野鐵五郎

牧野 『今日は長年の夢であった“復元機体”の吊り上げ式も無事終わり正直ホッとしたところなんです、その感激の納まらない間に皆さんにお集まり頂いて、復元作業の苦心談の一席をお聞きしたいと思いますが、最初にどなたか如何でしょうか』

北尾 『今度の復元作業のプロジェクトチームの常に先頭に立って、ここまで頑張ってきてくれた窪田君からどうですか？』

窪田 『イヤー、僕、一人の頑張りではなくて、今回の作業の成功は全員の協力の賜物で、その点お礼を言うのは私のほうですよ。格納庫の片隅に積み上げられていた“アローヘッド”と“イオラス”の姿を見ていると、もう居たたまれなくなって、後はただガムシャラに突き進んだだけで……』

牧野 『勿論窪田君一人のという訳ではないけれど、“復元の会”を立ち上げてから作業に入ると資材の調達に始まり、会員の連絡は勿論、寒い冬場や、暑い夏のマッサイ中には、ややもすると挫折しそうになる会員を励まし、愈々最後の吊り上げに関しても学校当局との色々の交渉に至る間の頑張りにはまさに表彰物ですヨ』

窪田 『イヤー、そんな風に言われるとテレルナ〜』（笑い）

三浦 『窪田君がやる前にも何回か復元の話はありましたし、現にやりかけた時もありましたが、結局実現しませんでした。その意味からいえば、今回最初の目標である復元を見事にクリアーし、更に吊り上げ永久保存まで漕ぎつけた努力は、本当に大したものだと思いますよ』

窪田 『何もかも皆さんのお陰です。ご賛同頂いた翔友会の会員の方々からのご協力、特に羽布を昔の基準の“三ツ桃”印の3000番に極めて近い現物を沢山に寄付して頂いた政先輩や、プライマリーの張線に使うピアノ線を寄付下さった西田会員、その他多額のご寄付を頂いた多くの会員のご協力に支えられて今日の吊り上げ式を迎えられたというのが正直なところではないですか？そういう意味では、今回の復元の最終ステージを無事迎えられたのは、文字通り、翔友会全員の勝利と言えるのではないのでしょうか』

牧野 『涙なしでは語れない美談で、（笑い）マーお互い褒め合うのはその辺にして、一番の苦心談など少し話して頂けませんか』

大久保 『私が一番苦心したのは、プライマリー関係では、各部品が紛失、欠如していたことで、昭和30年当時と同じ部品を今購入することは不可能で、勢いオリジナルを参考に1ツ1ツ削り出すことになり、これはもう三浦先輩の領域で、これには大変お世話になりました』

三浦 『イヤ、それは作業としては、それほど難しいことはありませんでしたが、規格もなにも無い現物をサンプルにして、一から作り出す苦労は十分味わいましたネ』

大久保 『それに窪田先輩が少しでもオリジナルに近くと“こだわる”ものですから、余計に苦労させられましたヨ』

窪田 『こだわる訳ではないけれど、復元という以上、可能な限り購入当初の姿に戻したいと考えましたからネ、無理を承知でやって貰いました。終わりの方では私より寧ろ大久保君のほうが“こだわり”もうこの辺でどうやと言っても反対に大久保君の方から叱られた位でしたヨ』

吉川 『寒い冬の格納庫で納得いくまで作業に打ち込む大久保君の姿には感銘を受けましたが、正直言うと、私のように年寄りにはその作業につき合うのはキツイときもありましたヨ』

大久保 『そらエライ、スミマヘン!』(笑い)

牧野 『部品の製作も大変だったと思いますが、羽布の張り替えも大分難行したのじゃありませんか』

加藤 『羽布を張り替えるときに皆が異口同音に言ったことが、“もっと学連に居るときに整備を熱心にしておけば良かった”と言う言葉で、ドーブの薄め具合から、羽布のたるませ具合、刷毛の使い方、どれ一つを取っても勉強不足をあのときほど思い知らされたことはありませんでした』

石元 『ドーブを塗ってベローンと羽布がタルンダときは、これがピンと張るかどうか心配で、次の整備の日に格納庫に来て、ピンピンに張った羽布を見てあんな安心したことはありませんでしたネ!』

窪田 『羽布を潤沢に頂いていたので、安心してやり直しができましたが、ギリギリだったらどうなっていたかと思うとゾッとしますネ』(一同そうだ、そうだと頷くこと頻り)

牧野 『機体の木製部分はどうかだったんですか?』

吉川 『なにせ、長年放置された状態でしたから、小骨の折損はもちろん、ガセットの接着部分のカゼインの老化、胴体部分も側板をはがすと、カゼインの接着部分がバクバクに離れていたりして惨憺たるものでした。幸い翼の桁とか、胴体の縦材などには大した損傷がなかったので幾分助かりましたが、それでも修理箇所の多いことと言ったら、そらもう大変でしたヨ』

河盛 『主翼の整備をしているときに、何の穴か分からぬ所が見つかり、皆で首をかしげていたら、牧野さんが“それは点検窓の開きだ”と言われ、成る程と思いましたが、骨組だけになっていると分からないことが随所に出てきて、簡単に復元と言っても仲々難しいものだと思いつくづく思いました』

石元 『私はいろいろと作業記録の整理をさせて頂きましたが、平成5年12月の復元する会の第1回会合写真に写っておられた佐々木、永田両先輩の顔が、その後何枚目かの記録写真から姿を消され、一番喜んで頂きたかった完成の日には既に亡くなられていたことは、返す返すも残念なことでした』

吉川 『そんな残念なこともあったが、整備をしている現場に小野先生や、橋本先輩が応援に足を運んでいただいたことは、大変嬉しいことだったナ』

窪田 『応援と言えばイオラスの整備に移ってから、立命館の航空部監督の林君が毎週のようにオートバイで駆けつけてくれたのも感激したナー』

竹鼻 『彼に聞いたら、林君は同志社のイオラスで最初の体験飛行をしたんだそうで、彼にとっても忘

れられない機体だったんだネ。復元の整備をしていると聞いてジットしていられなくて、殆ど毎回応援してくれました』

牧野 『話がイオラスに移ったようですが、イオラスの羽布の張り替えも大変だったようですネ』

北村 『翼の羽布と前縁のベニヤの境目が特に損傷がひどくて部分修理は無理かなと思いました』

加藤 『始めは部分修理で終わる積もりが、サテ始めると矢張り、全部やり直すことになり、イオラスの方は塗装で大分手間取りました』

牧野 『それはまた、どうしてですか？』

加藤 『それは塗料の吹き付けに使ったコンプレッサーの容量が小さくて、思うようにムラ無く塗料が吹き付けられなくて、大分てこずりました』

石元 『夏の炎天下、格納庫の外の作業はキツかったですネ』

窪田 『でもあの頃は最後の追い込みで、OB 総会までに仕上げるのに必死でした』

河盛 『私は三浦さんと一緒にイオラスの風防を作りましたが、樹脂板を風防の骨組にネジで止めるのと、円形の窓を開けるのには大変苦勞させられました。一寸無理をすると直ぐにピンと割れが走り、余り余裕の無い樹脂板で納めるのには大汗をかきましたヨ』

北尾 『色々と苦勞はあったけれど、苦しい作業のあと、皆でワイワイ言いながら飲んだビールの味はまた格別だったナー』

石元 『最初に窪田さんが呼び掛けた“復元する会”のメンバー募集にも、ビールでも飲みながらワイワイ、ガヤガヤ楽しくやりましょうを文字通り実践出来て、終わってみればこんな楽しいことはありませんでした』

河盛 『特に作業の最後の日に格納庫の前で開いたバーベキューの味は今も忘れられませんネ』（飲む話になると、皆の顔が一斉に輝くように見えるのは不思議だ）

太久保 『今日の吊り上げ式は我々の最終ステージではなくて、今日を第一ステップとして、また次なる目標を目ざして大いなる飛躍を考えたいものです』

牧野 『私にとっても、この3年間には、上昇、下降気流の入り交じった大変な時間でしたが、平成8年10月、両機同時に完成を迎え“上昇気流”と言う酒で乾杯したときのあの感激は下戸の私にも甘露の味を教えてくれました。特に私は途中阪神大震災で家が全壊し、途中休場を余儀なくさせられた関係で、よけいにOB 総会までに完成させ得たことが嬉しかったです』

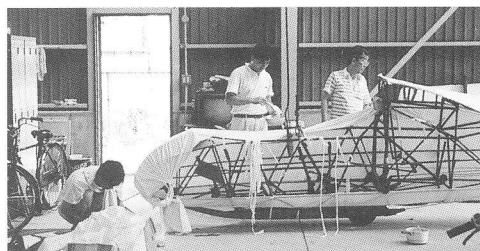
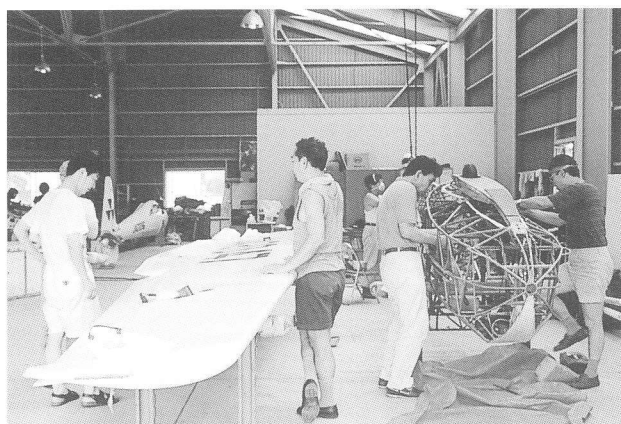
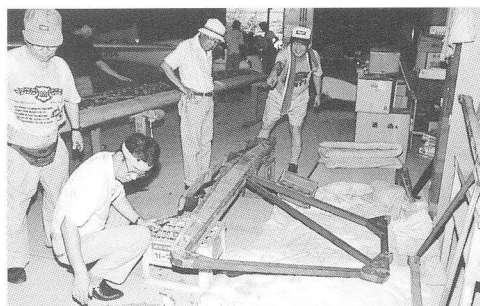
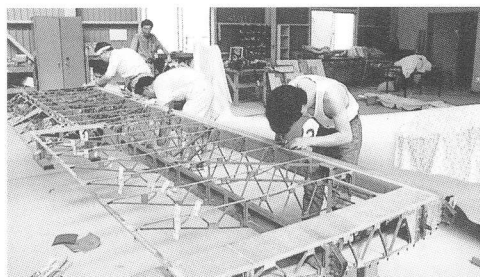
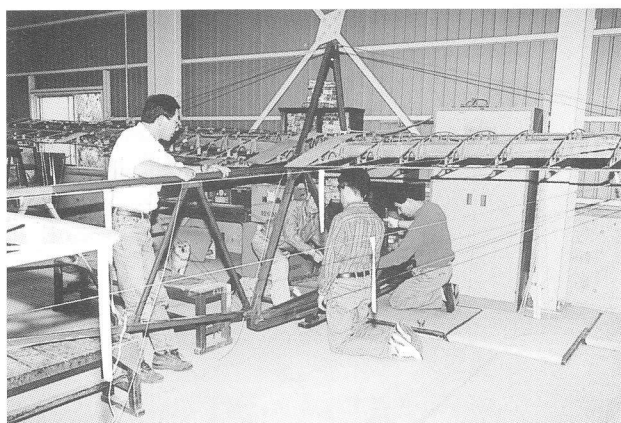
三浦 『60周年記念OB 総会に先立って行われた復元機体の披露式は色々の趣向があって両機の門出には相応しい式であったと思いますが今日の吊り上げ式も参加全員が何らかの形で式に参画できて、これもまた楽しい式典になったのではないのでしょうか』

吉川 『そうですネ。この種の式典では大体に於いて参列者はジット見ているだけですが、今日は全員で式を盛りあげ、自分も式の運営の一人として行動したという喜びを持ったのではないのでしょうか』

石元 『ただ今後の維持管理の点を考えますと、矢張り翔友会全体の問題として、会員全体が機会ある度に田辺の格納庫に集まり機体の整備に当たって貰いたいものですネ』（全員同感と頷き合う）

牧野 『石元君の言う通り、今までは『復元の会』が主になってことを運んできましたが、今後は誰もが、何時でも、何処にいても復元機体のことを気にして頂くような雰囲気になって貰いたいものと思います。私は何時も復元機体のことを考えるとき、思い出す言葉があります。それは窪田君が学生に何時も『汚れた手で“イオラス”を触るな!』と言った言葉で誰もがそんな気持ちでこれからも両機に接して頂きたいと思います。

今回の“復元する会”の第一ステージを終わるに際し、これまでに寄せられた大阪工大始め多くの方々のご好意に厚くお礼を申し上げると共に、次の新しいステージに向かって新たなスタートを誓いたいものです。今日は皆さんから面白いお話を聞かせていただいて有難う御座いました。これで今日の誌上座談会を終わります』



## ある春の日の午後

アローヘッド&イオラス

開けはなれた格納庫の窓から入ってくる春のそよ風が、天井から展示されたアローヘッドとイオラスを優しく撫でてゆく午後の昼下り……。

「なあ、イオラス君……。アレ、眠ってるンカイナ？」

「……ア、失礼しました。アローヘッドさん、ポカポカと気持ちがエエので、ついウトウトしてました。何か？」

「イヤイヤ、起こしてもうて悪かったナ。そやけど見てミ、今年も新入部員達が集ってきたようやデ」

「あ、ホンマヤ、さっきから夢うつ、にナンカ嬉しいナーと思ってました。オウオウ、可愛らしいのが大勢来ましたナー」

「そうやろ、けど、こうやって君と二人で生き返ってから、新人を迎えるンは何回目カイナ？」

「3回、イヤ4回目になりますネ」

「早いもんやナー。しかし考えてみたら、俺らは幸せもんやデ、仲間の中には、若い身空で事故ってしても無惨な最後を遂げたのや、無事におつとめを終えたのに、新しいのを買うから云うて見ず知らずの土地へ売られてもて、生きてるんか、死んでもたのかも判らんヤツ、そんなんはまだエエ方で、お役に立たへんようになった途端、手の平を返すように邪魔物扱い、あげくの果ては、命がけで育ててあげた人達にも看取られんと、寂しく残骸となって朽ち果てたんも多いと云うのにナー」

「おっしやる通り……。悲劇ですよネエ。でもアローヘッドさんもその寸前まで経験されて…」

「そうや、何年前かもう忘れてしもたけど、学連の三整の実技練習に使うとかで、八尾に連れて行かれ、羽布やベニヤを破ったり貼ったり、リブを折ったり継いだりされたあげく、それも用済みとなった後は、身ぐるみ剥がれた骨だけのカコウで、陽も入らへんシ、風も通らへん暗い湿った倉庫の片隅に積み上げられた時には、さすがの俺も年貢を納めたデ、もはやこれまでやと。時代は変わったんや、俺は時代遅れの代物なんや、最後に整備実習のお役に立っただけでも良しとせなアカンて自分自身に何度も何度も云い聞かせたンヤ」

「そうでしたか。つらかったんでしょ……」

「つらかったて云うのか、切なかったナー。一頃はあんなに可愛がってくれた同志社の皆にも忘れ去られたンかと思うてナ……。自分の体のあっちこっちが朽ちてゆきよる音を自分の耳で聞きながら、玉水の空や砂や風を、その時の部員の顔を一人一人思い浮かべてたんや。そら、恨む気持も無かったと云うたらウソになるけど、とうとう運命を受け入れて眠りについたて云うのか、悟りの境地と云うのか……。そうしてまた永い月日が経ったある日、訪れる人として無かった倉庫が突然に開けられて、意識もうろうとした俺の耳に、『ああ、有った有った！これや！うちのハト K-14 や！』と叫ぶ元気な声が飛びこんできたんや」

「びっくりしたでしょう。うれしかったでしょう」

「イヤ、また夢を見ていると思うたんや。何度も助け出されそうになる夢を見てたからナ。そしてまたガッカリするだけやと、必死で目を覚まそうともがいてたんや。けど、今度はいつもの夢と違うネン、そっと労るように持ち上げられたんや。『えっ！何がどうなってん？』と事態が飲みこめずに辺りを見廻すと、いきなりまぶしい外に出されて、眩む目にはっきりと見えたんや、トラックのボディにあの懐かしい▼マークが！……」

「……………」「へー、どないしてんイオラス、だまってしもテ」「だって先輩……」

「そうや、うれしかったヨ。やっぱり同志社の人達は俺のことを忘れてへんかったンヤと思うと、たとえ一時でも恨んだことを申しわけのう思うたよ。俺のことはもうエエ、それよりアンタもつらかったヤロ」

「先輩の苦勞に較べたら、私なんか……。けどやっぱりつらかったですヨ。関西で最初のソアラーでしたから、箱入り娘のように大事に大事に扱われ、他校からは羨望の目で見られてチヤホヤされて、関西・東海の全大学の学生を乗せて、八尾・高松・富山・鶴野・岡山・加古川・福井・吉井川・木曽川と飛びまわりました。昭和40年の第15回全国大会では同志社の準優勝に貢献したのに、年中休み無しの酷使で体のあちこちにガタが来てしもて、ASK-13に2代目を譲った途端、もう見向きもされなくなってしもうて、格納庫の隅に折りたたまれて、『場所だけ取る邪魔物ヤー』みたいな扱いを受けて、永い間冷たい視線に耐えて来ましたからネェ……」

「まあ、それもこれも仕方の無いことかも知れんナー。そやかて、あの頃の部員達が、俺達を買うために、どんなに汗水流して苦勞したか、そう

して俺達を通して後輩に託した夢と希望がどんなに大きなもんやったかは、その後の部員達は知らへんもんナァ」

「そうですね、でももう忘れましようよ、昔のことは。今はこうして二人共幸せな引退生活を送らせてもらってるんですもの」

「そうや！その通りや。おっとイオラス君、また今年も俺達を下に降ろして、OBが伝統を伝える新人教育が始まるみたいや。さあ、シャンとせいで！胸を張って」

「ハイッ！その後で、今年も新人達が一年間のホコリを払って、磨いてくれますもんネ!!」



撮影 三浦 智介氏